

『源氏物語』の男たち

ミスター・ゲンジの生活と意見

田辺聖子

の男たち



ミスター・ゲンジの生活と意見

田辺聖子

岩波書店

『源氏物語』の男たち

一九九〇年一月二六日 第一刷発行©

定価一四〇〇円

(本体一三五九円)

著者 田辺聖子

発行者 緑川 亨

〒101-02 東京都千代田区一ツ橋二丁目五
発行所 株式会社 岩波書店

電話 〇三―六五―四二二
振替 東京六二六二〇

印刷・凸版印刷 製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN4-00-000612-6

目 次

I ミスター・光源氏の場合

II ミスター・夕霧の場合

あとがき

247

I
ミ
ス
タ
ー
・
光
源
氏
の
場
合

1

『源氏物語』のブームはとどまるところを知らないようにみえる。この物語がこれほど普及し、愛読されるようになったのは日本史上、はじめてではないかと思われる。書かれたリアルタイムの王朝時代でさえ、熱狂したのはほんの一握りの有識者層であつたらうから。

これは印刷文化の発達や、政治・思想的制約(戦前は皇室不敬罪というのがあつて、文芸的古典の研究まで掣肘を受けたし、儒教道德信奉時代は、『源氏物語』は誨淫の書として貶^{おとし}められていた)が消滅したせいもあるが、何より、『源氏物語』が大人の鑑賞に堪える、骨太で面白い芸術作品であることが人々に認識されたからであらう。千年の昔であらうと現代であらうと、面白い小説は面白いのだ。

——尤も現代の『源氏』ブームは殆んど女性たちが支えているらしいこと、王朝のむかしと変らないように思えるのは、微笑を誘われるが、しかし往古は男性知識者層の方が女性より数が多かったから、割合からいえば男性も多く読んでいたらう。

男性読者は現代には少いようであるが、私はそれは、『源氏』研究者の怠慢だったのではないかと疑う。今までは登場する男たちの面白さを充分に紹介しきれぬ憾みがあつた。

『源氏物語』の男たちはみなそれぞれ個性的で魅力あり、興深いのだ。『源氏』のヒロインたちについて語られることは多いが、女主人公たちばかりでは片手落ちで、男たちについても大いに論じられなければいけない。

なんでこんなことになったかというと、原典に忠実すぎる現代語訳のせいではないかと思う。勿論、原典に忠実に現代語訳することは紹介者として大切な心得ではあるものの、逐語訳ではなく、本質をつかみ取って枝葉末節の形容に足をすくわれない、という方法もとるべきだろう。

紫式部は主人公の光源氏にぞっこんで、その美男ぶりを讃美するのに精力的である。

「女にて見たてまつらまほし」「いとめでたし」「目もあやなるに」「この世のものともおぼえたまはず」——こんなのにいちいち、律儀につき合っていたら、王朝の色男の、卵に目鼻、というのっぺりした印象だけ残って、主人公の存在感はいよいよ薄くなってしまう。

それゆえ、

へ女の描写は面白くて、一々、個性的というのは分るが、男が何やらよく分らなくて読みつづける興味をなくした

という男性読者の発言があったりする。

主人公の顔が見えなければ、小説の面白みはない。

私は以前、『新源氏物語』(新潮社刊)という現代語訳を出したが、それは原典の省筆を補い、あるいは思い切って削除して、登場人物(ことに光源氏)のイメージを明確にするという挑戦の試みであった。原典に忠実に物語を展開しつつ……。

このたびはその意図をおしすめ、光源氏ばかりでなく『源氏物語』に登場する主だった男たちを取り上げ、エッセー風にその魅力をときあかしていこうと思う。

彼らはそれぞれに男の典型であって、現代によみがえってもいきいきとしているように思われる。ことにやはり光源氏は男として中々に面白い。さすが大長篇の骨格を支えるに足る造型であり、千年の風霜に堪える人間の本質を示唆しているように思われる。男たちの素顔を見ることができれば、『源氏物語』はいやさらに生彩を帯びて面白くなるはずである。

ミスター・光源氏が活躍するのは『源氏物語』の正篇というべき、「桐壺」の巻から「幻」の巻までであるが、だいたい一般知識として把握されている源氏の君のイメージは、たくさんの女たちと愛情交換をして、ナニかまずいことをしてかし、須磨へ流された、ということぐらいである。須磨からあとはどうなったか、ようわからん、という人が大多数であろう。

実は、源氏の人生は、そのあとのほうが長い。それまでは三分の一にすぎない。だから源氏という男の面白さは、ほとんど人に知られることなく埋もれている。

源氏その人よりも、彼の出生にまつわる悲話のほうが、人々にはよく知られている。

いずれの時代の帝であったか、桐壺帝の後宮にはあまたの美妃がいたが、帝は桐壺の更衣を熱愛する。更衣は女人たちの有形無形の嫉妬や怨みに身も細り、男御子を生んで亡くなる。それが源氏で、三つの年に母に死に別れたのである。

そのあとは、母方の祖母の手で育てられ、それも六つの年に祖母は死ぬ。祖父は早くになくなっている。

源氏という男は身内に縁がうすく、その限りでは薄幸な育ちである。それに六つまで祖母に育てられた、というのが、源氏を「お婆ちゃん子」にしている。

母の顔も知らず、やさしいお婆ちゃんの手で育てられたという経歴が、源氏を、女性心理に通曉させる。女の発想、女の価値観に共鳴できる素地を作っている。

源氏の若いときからのライバルである頭の中将が男性的発想でもって、人生を公私ともに裁量してゆくのと、まことに対照的である。

まず、お婆ちゃん育ちの源氏は、一種の婆さんキラである。情人おんなたちの周りのお婆さんにやさしい。朝顔の宮という皇族の姫に長年、求愛しつづけているが、この御殿へいく

と、同居している叔母宮の、老内親王にまず挨拶にゆき、長々しい古物語に辛抱してつきあう。花散里はなちりごとという恋人を訪れた時は、これまたその姉の女御にようごの方にまず、話しかけ、やさしい心遣いをみせる。明石の上の所へいくと、その母君なる尼に、至らざるなきいたわりの言葉をかける。

正室の葵の上は早死にするが、そのあとも亡妻の両親、舅と姑を、源氏はよく省みる。ことに姑にはやさしく、実の息子のように仕える。

『枕草子』には「人に知られぬもの」として「人の女親めおやの老いにたる」をあげている。女親は邸の奥深く籠って人前に出ることはないので、当時は忘れられやすい存在であった。源氏はそういう婆さんたちをもやさしく慰撫する。これは生得しょうとくのもので、源氏が、将を射んとせば馬を射よと、意図したものではない。作者の紫式部は、男性にあらまほしい徳目として、やさしさをまず考えていたらしい。

しかし、やさしいだけではない。源氏は、乳母の病気が重いと聞いて、わざわざ下町の家へ見舞に出かける。乳母は、勿体ないことと涙をこぼして喜ぶ。源氏も涙ぐんで、へばあや、長生きしておくれ。もつと僕が出世するのを見てくれよ。ばあやをまだ頼りにしてるんだ、会えないと心細いよ。

とこまやかに語りつつ、（それは源氏の本心なのであるが、）乳母の家を一步出ると、隣

に氣を引く女世帯の家がある、早や関心はそちらに向き、

へあの西隣は、どんな人が住んでいるんだ」

ともう、いつもの癖で好奇心の炎むらむら、という状態である。このへんがまことにおかしい。乳母を見舞うときは、女性感覚で、そめそめと柔媚な言葉が出てくるが、それと抵抗なく奔放な恋の渉獵者のエネルギーが同居している。

決してやさしい一方の男ではないのである。

女の描く円周から常にはみ出しつづけ、女の手に負えない男である。人の世の掟や倫理の手綱も、彼の情熱を押しとどめることはできない。何ものを以てしても矯められない、悍馬のような男なのである。ことにも若い頃の行状は褒められない。

それは、お婆ちゃんを亡くしたあとの源氏の育ちにもよる。お婆ちゃんの死後、源氏は宮中の父帝に引き取られ、その膝下で育つ。愛する人の忘れ形見というので、父帝は源氏にはたいそう甘い。

宮中の女たちも、美貌で聡明な少年をちやほやする。源氏が驕慢なプレイボーイになつたとしても、仕方のない環境である。朧月夜の君に言い寄り、へ人を呼ぶわよ」と女にいわれると、へどうぞ。僕は何をしても許される身分なんだよ」と不敵に言い放つ。この女は政治的に敵対する立場の右大臣の娘で、源氏の兄の皇太子の妃なのに、源氏は逢曳をつ

づけ、ついに右大臣に發覺するのだが、右大臣と顔を合せてもたじろがず、あわてないという小憎らしき。朧月夜のベッドの中に青年は横になったまま、原典によれば「今ぞ、やをら顔ひきかくして、とかうまぎらはす」〔賢木〕——今になってゆっくりと衾ふすまなんぞかぶって顔をかくしたりする。見付けた右大臣は、怒りと驚きで目の前がまっ暗になったというのに、青年は涼しい顔である。

八つ年下の紫の上を、少女の時から育てたエピソードは人によく知られているが、紫の上をどうやって得たかは、知らない人も多いであろう。母に死別したあと、育てられた祖母をうしなつて、ひとりぼっちの紫の上は、別居している父親が引き取る手筈になつてゐた。その前夜、源氏は父親に無断で誘拐拉致してきたのである。まだ九つの紫の上に、源氏は、かねて眷恋けんれんしている義母の藤壺のおもかげをみとめて、わが手に入れたと思つたのだ。父親の鼻先から掠めたのであるから、これも無体なやりくちである。藤壺への懸想も、源氏は真実の恋、と思つてゐるが、人生に驕つた怖さ知らずの思いあがりであろう。

そういう倨傲が碎かれる日がくる。父帝が崩じて御代替りとなり、源氏は須磨明石へ退去する。父帝の威を笠に着て放恣な驕つた青春は去つたのである。今まで追従していた人は去り、てのひらを覆すように人々は背き去る。源氏はしたたか、世の中について勉強する。その代り、得たものもある。男の友情である。

いったい、源氏は、女たちにもやさしいが、男にもやさしい。源氏は須磨退去のとき、腹心の部下だけを連れていくが、彼らは出世を棒に振って源氏についていくと心きめた者たちばかり、源氏を囲んで男同士の寓居で友情を暖め育てるのである。更に都から、頭の中將が、敵方ににらまれるのを覚悟で、陸路はるばる源氏を尋ねてくる。源氏はこの幼馴染みと手を取り合つて〈男の友情〉に涙する。

源氏は男にも女にも好かれる人間的魅力のある男、として描かれているが、これまでの源氏は行動派であつて、あんまり意見を吐かない。

やがて許されて帰京し、政界へ復帰した源氏は、壮年の政治家として面目を一新する。公私ともに人生は充実した。もう獵色家の青年貴公子ではなく、国家の柱石、政界リーダーとして権力の中枢に坐る。

権力家としての源氏は、怖い男である。逆境のとき、自分に冷たかった人間を許さない。執拗に復讐する。しかしまた、一人息子夕霧（亡妻の葵が残した忘れがたみである）を甘やかすこともしない。肚の坐つた教育論を、源氏は吐く。母方の祖母の手もとで養育されていた夕霧は、元服後、祖母から離される。甘やかされてしまつては学問も身につかぬであらうという、源氏の教育的配慮である。源氏の子息という身分からいえば、元服後すぐに四位に叙されるところであるが、源氏はわざと下級の六位にする。本人はもとより、祖

母も不満であるが、源氏は縷々と祖母(姑)に説明する。

「実力をつけさせてやりたいので、大学でみっちり勉強させたいと思うのです。——身分の高い家の子に生れますと、官位も思うままで、榮華に馴れて奢りたかぶってしまいます。そうなると学問して身を苦しめるなどということは縁遠いことに思うでしょう。遊びごとにふけり、位ばかり高くなりますと、世の人はかげで馬鹿にしてせせら笑いながら、うわべでは追従し、お世辞をいっていうなりになります。そんなありさまのうちは、一人前に立派にみえますが、いったん時勢が変り、親などに死別して勢いも衰えますと、人に輕蔑されて、おちぶれてしまいます。やはり、学問の基礎があつてこそ、政治家としての実力が發揮できましよう。もどかしいようですが、将来の国家の柱石となるべき教養を、いましっかりと身につけてやれば、私の亡いあとも安心できましよう」

きびしい父親なのである。(そのきびしきは源氏の愛でもあるが)息子^{くもいのかり}の夕霧はそのきびしさに内心、気が晴れず、(こんなに苦しい勉強をさせられなくても、高い位にのぼって世間に重んぜられている人もあるのになあ)と思ひながらも温順な少年なので、孜々と励む。

この夕霧は、祖母のもとにあずけられている間に、雲居雁と恋仲になる。これは昔の頭の中將、今の内大臣の娘である。怒った内大臣は娘を引き取り、恋人たちの仲を裂く。夕

霧は実直で、思いこんだら気持を変えない男であるから、何年も忍耐強く事情が許すのを待って、ついに内大臣の心も解け、二人は晴れて結婚する。

源氏は夕霧の慎重な進退を褒め、

「恋愛問題では賢い男もつまずくことが多いが、見苦しく思いつめたり焦ったりせず、おちついて待ったのはえらいよ、中々、できないことだ」

と評価し、自分の若い時とは全く違う夕霧のよさを、息子ながらにみとめるのである。更に、内大臣とのつきあいかたも夕霧に諄々と教える。

「内大臣はしぶんかたくなに反対していられたが、自分から折れて出られたので、世間の評判になるだろう。だからといってお前が得意顔になつてはいけない。まして浮気な気持を出してはいけないよ。あの内大臣はいかにも寛大で度量が広いようにみえるが、内実のところ男らしくない、ひと癖あるかただ。つきあいにくい点がありだね」

源氏は人間洞察家であるから、批判力や把握力はたしかである。しかもまた、それゆえにこそ、人間のうちのよきもの、美点を見抜き、それを珍重する。源氏は、人間のよきを見抜くのが大好きな男である。人間を愛する、というのは生きることと愛する、ということもよい。

功成り名遂げた源氏は、六条に宏大な邸を新築して、愛する女人たちを蒐める。紫の上

も明石の上も花散里も、そこへ蒐められる。ただしかし、今までの旧邸にとどめおかれた女たちもいるのであって、みながみな、六条院にコレクションされているわけではない。

末摘花^{すえつばな}とか空蟬^{うつせみ}とかいった、一風変わった、もう源氏の愛情生活からへ一、抜けた〳〵おりの女たちが、旧邸で源氏の庇護をあてにして暮している。源氏のやさしさは、こういう女たちに向ってもそそがれる。やっぱり、いいところをみつめてやろう、みつきたい、という気がある。末摘花は身分が高い姫君なので、源氏も気を遣って、重々しく取り扱ってやっている。若い盛りでさえ見られない醜貌^{みにくさげな顔}だった彼女だから、いまは更に興ざめたはずまいで、気の毒なばかりである。源氏は見られなくて、間に几帳を置いて向う。

しかも末摘花のあわれさは、源氏のやさしさに安住して、心から源氏によりすがっていることである。昔よりもうちとけ頼りにし、源氏がものをいうと、ぎごちなながら笑顔を見せるようになっていく。源氏はそれがいじらしい。寒そうな末摘花を見て、

へあつたかくしていられっしやい、着物を何枚も重ねなさい、ご用の時は私にそういつて下さいよ、私もうつかり者だから、気がつかなくてね〵

とやさしくいい、倉の中の絹や綾を与える。

へお坊さんの兄さんに、愛用していた黒貂^{てん}の毛皮を取られて寒くてたまりませんの〵と末摘花は訴え、